

# 日本語学

Contents

2010. DECEMBER

vol.29-15

12

特集

「専門用語」研究の今後

専門用語研究の現状……………

青戸 邦夫 4

医学用語の現状と課題……………

開原 成允 14

現代日本語に浸透した学術用語……………

真田 治子 26

日本の術語、中国の術語……………  
——その歴史的歩みと展望——

沈 国 威 36

韓国語の専門用語との比較研究……………  
——化学専門用語に用いられる漢字を中心に——

成 明 珍 46

連載

ことばの散歩道151  
日本語の世界分布図

井上 史雄 25

リレー連載第20回  
私が勧めるこの一冊  
『言葉の文化史』

浅野 敏彦 58

国際交流基金レポート 13  
自律学習支援とポートフォリオ評価

石井 容子 66  
熊野 七絵

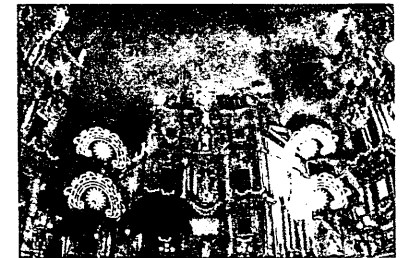
新刊クローズアップ…………… 35  
虎の門通信…………… 80  
新刊・寸感…………… 82  
情報源…………… 84  
次号予告…………… 88

日本語学 12  
2010. DECEMBER  
vol.29-15

表紙写真◎四つ辻に浮かぶ光

撮影：山田茂雄

クリスマスシーズンのヨーロッパの町は、どこも趣向を凝らしたイルミネーションで彩られる。シチリア島・パレルモのクワトロ・カンティも、夜の訪れとともに光に照らされる。この四つ辻は、普段は建物に据えられたゴシック時代の彫刻で有名で、観光名所となっているが、この時期ばかりはイルミネーションの方が目立ってしまう。主役の座を奪われた彫像たちは、300年前には想像できないほどにまばゆい光の海を見下ろして何を思っているのだろうか。



# 日本の術語、中国の術語

—その歴史的歩みと展望—

特集

## 「専門用語」研究の今と後

沈国威

### 1 簡単な回顧

術語問題は、西学東漸という西洋の新知識のアジア伝来によって引き起こされた事件である。一六世紀末マテオ・リッチ（利瑪竇）ら中国に渡来したイエズス会士は、宗教书と同時に天文、地理、数学の書を訳出した。この「天学」の「余緒」であった「格物窮理之学」は内容面だけではなく、言語面でも中国の伝統的学問と異なる方法を要請した。一六〇八年に刊行された『幾何原本』（前六巻）は、各巻の巻首に術語説明の部分があり、用語について定義を行っている（注1）。イエズス会士らの著述において多くの訳語が考案され、今日の天文学、数

学、地理学に関する術語の基礎が彼らによって築かれたといっても過言ではない（注2）。中国はその後、厳しい禁教時代に入り、宣教師による翻訳活動、そしてそれに伴う術語の制作も下火になった。一九世紀初頭、中国に渡来したプロテスタント宣教師が、百年以上の断絶を乗り越え、新しく布教事業を再開させた。それと同時に、イエズス会士らの訳語を継承しつつ、世俗書の翻訳にも励んだ（注3）。一般の訳語を扱う英華辞書類と並行して術語の辞書も編纂されるようになる。ホブソンの『医学英華字釈』（一八五八）、ドゥーリトルの『英華萃林韻府』（一八七二）、及びその後の江南製造局翻訳館による化学、機械学、薬学の用語集、宣教師の組織博医学会

の医学用語集がそれであった（注4）。通俗の言葉が用いられた広州時代の術語が一般読者を対象とするならば（注5）、江南製造局翻訳館と博医学会の術語はそれぞれ現場の技術者と学校教育（教科書類）のために用意されたものという分類が可能である。

一方、日本では江戸中期から蘭学が隆盛を迎えた。『解体新書』（一七七四）の刊行はそれまでに漢籍経由でしか入手できなかった西洋の情報、知識を直接オランダ語の書籍から摂取することに成功したことを意味する。翻訳の際に遭遇した幾多の困難は、とどのつまり術語の問題であった。『重訂解体新書』（一九七八成、一八二六刊）では、術語創出に関する意識が飛躍的に高まり、造語法も整理された（注6）。

明治時代の幕開けと同時に新知識の導入が加速した。明治二〇年代に入ってから『工字学彙』（一八八八）、『物理学術語和英物独対訳字書』（一八八八）、『数学二用キル辞の英和对訳字書』（一八八九）、『鉱物辞彙』（一八九〇）などの術語集が相次いで刊行された。日本語による近代科学技術の教育と研究に必要とされる術語の整備は一応目処が立ったと見てよからう（注7）。その後、言文一致の実現と相まって、術語を含む近代日本語の語彙体系が形成されていくのである。

近代の東アジアにおいて漢文が唯一の学問言語であり、訳語・術語の創造も漢字以外の選択肢はなかった。現在、日中を含む漢字文化圏にかくも多くの同形の術語が存在しているのは大規模な語彙交流があったためである。明治維新以前は無論のこと、明治期に入ってからもしばらくの間、中国の漢訳洋書が日本への訳語の提供源であった（注8）。例えば前述した『英華萃林韻府』（一八七二）に収録された天文学、地理学、数学に関する術語は、日本に大きな影響を与えた（注9）。上記の学術分野に中国由来の術語が数多く存在している所以である。しかし明治維新によって文明開化を成し遂げた日本とは反対に、一九世紀八〇年代以降、中国社会は停滞し、術語創作も見ろべき成果はなかった。二〇世紀に入り、近代化を急ぐ中国は日本経由で西洋の知識を導入せざるを得なかった。日本留学と日本書翻訳のブームが起き、日本製術語も怒濤のごとく伝来した。日本の術語と宣教師らの術語が競合した状況は、ヘムリンの English and Chinese Dictionary, 1916（官話）に見られるが、はやくも中国最初の近代的国語辞書『辞源』（一九一五）においてすでに日本製訳語の勝利は決定的なものとなった。今日、中国の術語は、医学用語をはじめ、物理学、地質学、鉱物学、その他の分野で日本製の術語が中心を

占めており、人文科学に至っては全面的に日本の術語に依存している(注10)。

上述した術語を含めた近代漢字語をめぐる語彙の移動を筆者は「共創共有の歴史」として捉えている。日中は互いに影響し合い、創出に深く関わり、その成果を漢字文化圏で共有している。漢字術語の形成は国境と言語を超えた東アジアの文化的事象である。

## 2 異なる取り組み

中国教育会(益智会)編の「Technical Terms」が世に送られたのは一九〇四年であった。この数万語を収録した術語辞書は百年に渡る宣教師らの努力の集大成である。しかし結果として、定着したのは僅かである。このような結果を生じさせたのは、中国の近代化の遅れ・政治制度の改革、近代的教育制度の確立といった社会問題に起因する部分が大きかったが、術語創出の方法における日中の相違も無視できない要因である(注11)。

日本では、蘭学者たちが自らオランダ語という外国語と対峙し、漢字という記号体系を用い、訳語を造ろうとした(注12)。「解体新書」で「翻訳、義訳、直訳」という方法論を展開させた。それぞれ既存語による対訳、意

訳、音訳という現代のチームに置き換えられるが、意識には単純語に対するものと複合語に対するものがある(注13)。前者の例に「神経、植学、細胞」などがあり、

後者の例に「軟骨、盲腸、植民」などがある。本稿ではそれぞれ意識と逐字訳と呼ぶ。意識が外来概念に対する正確な把握を不可欠とするならば、逐字訳は、外国語そのものに對する深い知識が必須条件であると言える。例えば「重訂解体新書・名義解」にはオランダ語、ラテン語に對する形態素レベルの分析が随所に見られる。このような分析によって、形態素レベルの対応関係を成す語

基が確立し、訳語の量産に繋がった(注14)。一方、蘭学者はオランダ語、ラテン語の発音を転写するための漢字を用意したが(注15)、音訳語自体は多くなく、「機里爾」が「腺」に改訳されたことから分かるように音訳語を解消する努力も見られた。蘭学術語のもう一つの顕著な特徴は漢字の取り扱い方にある。中国では外国の新概念に對処すべく絶えず漢字を増やしてきた。「魔塔」などはその例である。蘭学者も同じ発想を持っていた。例えば大槻玄沢は訳語の創出について、「翻訳する際、訳語を原語に正確に對應させるように務めている。そのため勝手に造語をし、また新しく字を作らざるを得ない。いわゆる朧、臆、撮護、解体、神経、濾胞などは

皆そうである」と述べている(注16)。例として挙げられているものの中では「朧、臆」が「新製字」で、その他は「勝手な造語」ということになる。実は「朧」は

新製字ではなく、廃れた漢字にすぎない。大槻は「朧」や「臆」といった廃棄された漢字で「band」の意味を表そうとしたが、最終的に『和蘭内景医範提綱』(宇田川玄真一八〇五)で「腺」という新作字に落ち着いた(注17)。「臆、臆」も新作字の例であるが、新しく漢字を製作する方法は蘭学の術語創出の主流にはならなかった。明治以降、さらに「疔(キログラム)、糞(センチメートル)、

糞(キログラム)」などの合体文字も考案されたが、いずれも単音節ではなく、記号として見るべきであろう。明治期の学術用語の制作においては基本的に「中国の古典語を用いよ、それが無い場合、新しく創作せよ、但し音訳語を避けよ」という蘭学の原則が守られていた。音訳語の台頭は終戦後であった。

一方、中国では、術語に関する思索は少なかった。徐繼畬は、『瀛寰誌略』で地名人名の音訳字を取り上げたが、同人(地)異名の混乱した使用状況の指摘に終わった。『英華字典』(一八六六〜一八六九)の編者であるロブシャイトが初めて化学元素名の翻訳を問題提起し、新字による命名法を提案した。

術語全般について最初に議論を展開させたのは江南製造局翻譯館で翻譯活動に従事したフライヤーである。氏は自分の翻譯経験に基づいて、西洋の言語を中国語に翻譯する際の問題や訳語の考案について論じた(注18)。

文章の中でフライヤーは、「西洋の学問や術語に相当するものがない」ことが翻譯の最大の障害となっているという意見には同意し、「西洋書を翻譯する上で、何よりも重要なことは訳語である」と指摘している。

訳語の創出法について、フライヤーは江南製造局翻譯館での実践を踏まえ、次のように提案した。一、中国ですでに刊行された科学技術の書物、或いはイエズス会士や最近来華したプロテスタントの宣教師らによる書物の内容を調べることや中国の行商人や、その術語を知っている製造業者、職工に問い合わせることにより既存の訳語を発見し、用いる。二、新作字、複合語、音訳語といった方法によって新しく訳語を考案する。

しかし詳しく取り上げたのは新作字による化学元素の命名だけであって、複合語と音訳語について検討を加えることはなかった。中国語では意味区別の機能のある音節数は一五〇〇未満で、新語の創出は多音節の複合語に頼らざるを得ない。前述のように、訳語としての複合語は、逐字訳と意識に分けることができる。フラ

イヤーが挙げた例語「養気、軽気、火輪船、風雨表」などから見れば、意訳語が主体であることが分かる。当時の翻訳は、外国人が口述し、中国人が筆記するという方法を採用しており、中国人は外国語を解さないため、外国人の口述は往々にして具体的、描写的にならざるを得ない。例えば、Oxygen、Hydrogenの日本語訳「酸素」、「水素」は原語の語根を忠実に直訳したものである。対して中国語の「養気」、「軽気」は、現場性の強い、通俗的で分かりやすい意訳となっている。フライヤーは、一八九〇年に開催された第二次プロテスタント宣教師全国大会で、再度学術用語の問題を取り上げた(注19)。大会に提出した論文でフライヤーは、音訳語に反対し、意訳の方法で訳語を創出すべきと主張していた。しかし氏は複合語の造語法に殆ど関心を払わなかった。その代わりに廃棄された古い漢字の利用法や新漢字の創作法に議論を終始させた。フライヤーは、偏旁部首は漢字を構成する最も顕著な特徴の一つであり、新しい術語はできるだけ中国語のこの重要な性質を尊重しなければならぬと述べている。フライヤーは漢字の分解可能性および偏旁部首の表意機能が中国語の構造上の基本的な特徴とまで考えていたほどである。このように来華宣教師たちは日本の蘭学者の訳語創造と異なる道を選んだのである。

学術用語の体系的構築が成功する見込みはない。これが、宣教師が我々に残してくれた教訓である。

### 3 中国の術語問題について

ここでは近代以降、中国における術語選定事業について簡単に紹介する。中国は二〇世紀一〇年代から政府主導の術語標準化が急がれた。これは宣教師系の術語と日本製の術語が競合し、大きな混乱を来したためである。まず清学部(文科省相当)は、混乱を極める術語を統一しようと編訂名詞館を設立し、著名な翻訳家嚴復を責任者に据え、術語の選定を進めた。一九〇九年秋のことであった。同名詞館は一九一一年一〇月清王朝崩壊まで、三万語以上を審査したが、公開することができず、English and Chinese Dictionary, 1916(官話)に一万六千語が収録されたのみであった(注21)。時代が民国に変わり、一九一八年に科学名詞審査会が成立し、一九二八年に訳語統一委員会が設置された。同委員会は一九三一年までに、化学、物理学、数学、動物学、植物学、医学等の術語集を審査し公表した。一九三二年に各学科の術語の作成、標準化、普及に全責任を負う機関として国立編訳館が設置され、一九三八年の『算学名詞彙編』を皮

フライヤーが提案した造字による化学元素の命名は江南製造局の翻訳書によって広がった(注20)。同時に、新しい訳語の創出は、即ち新漢字の創造であるという間違ったシグナルを世に送った。造字法は、特に博医会に医学用語の体系的構築に最良の方法と高く評価され、極限まで推し進められた。博医会の術語は殆どすべて新しく造られた一漢字のもので、骨、血、月などの偏旁が付いている。しかしまもなく奇異な新作字による博医会の術語は日本製の医学用語に取って代わられたのである。

漢字は、絶えず増殖し続けることが可能な開かれた文字体系と見なされており、歴史的に見ても新たに漢字を創出することは概念の増加に対処する最も重要な方法の一つとして用いられていた。しかし、日本の蘭学者は、中国の古典語を用いて外国語を訳出する方法こそ正統なものとして信じており、どうしても中国の古典から語句が見つからない場合には、新しい漢字ではなく、新しい複合語を創作した。一方、「六書」の原理に魅力を感じた来華宣教師は、新たに漢字を作り訳語とすることに熱心であった。しかし語彙字の見地から見れば、中国語に限らず、新語は複合語方式でのみ増やすことができ、新たな語根創造はもはや繰り返せない歴史となった。限られた音声形式に対し、言語を記録する符号を増やすだけでは

切りに一九四九年までに各学科科学技術名詞草案を六〇種公表した(注22)。術語の選定事業は戦争中も中断されなかった。五〇年代に入ってから中国大陸は、学術名詞統一委員会を立ち上げた。術語の審査にあたった者は著名な科学者だけでも一五〇名にも達したという。一九六六年から始まった文化大革命によって教育・研究活動は停滞に陥ったが、一九八五年に全国自然科学名詞審定委員会が設置され、文化大革命で大幅に立ち後れた自然科学分野を中心に術語の整備、標準化が急ピッチで進められた。一九九八年に同審査委員会より『科技術語研究』が創刊され(現在『中国科技術語』に改名)、術語に関してさまざまな角度から議論がなされている。

### 4 漢字による術語の創造に未来はあるのか

時代が変わり、漢字使用圏において術語創出での漢字の重要度も大きく変わったように見える。日本では戦後、カタカナ語によって外来新概念を受容する事例が増えた。漢字制限の政策は、カタカナ語の増加に拍車をかけ、術語の制定もこの流れに大きく影響された。カタカナによる音訳という術語の創作法は、概念の導入に簡単かつ迅速に対応できる利点がある反面(注23)、意味の

体系性と透明性が犠牲となるデメリットも否めない。韓国語についても基本的に同じことが言える。今日、術語の一般語彙化によってカタカナ語の問題が深刻になり、国立国語研究所で行われた「言い換え」という試みに繋がった。

中国でもこれまでの表記体系になかったローマ字、或いはローマ字混じりの術語の問題が持ち上がった。時事、スポーツとIT関連の分野で多用されている。DVD、WTO、GDPやG7峰会（G7サミット）、NBA夏季（NBAシーズン）などである。果たして漢字による術語の創造に未来はあるのか。

表意文字としての漢字は音訳語に向かないのは誰しも認めるところであろう。精密に音を表せないだけでなく、字意がつきまとい、邪魔になる場合も多々あるからである（注24）。

また、新しく漢字を作り、術語にするという方法も歴史的に見て問題の解決には繋がらない（注25）。

漢字使用に立脚し、道を切り開くほかない。東アジア諸言語のような音節言語について術語の漢字使用の可否を個別言語の特質に結びつけて議論を深める必要を感じ（注26）。

一般語彙に比べて、厳密に定義することを要求される

の構築が求められる術語の形成に寄与する。日本語から「化、性、員、手……」など多くの接辞成分を導入した中国語は、現在語基をさらに発達させ、新しい術語を創出している。また語基はその類推機能により、術語の産出を簡単にしている点にも留意すべきである。

グローバル化が叫ばれる昨今、学問の世界だけではなく、一般の社会生活においても術語問題は依然として存在している。中国語圏を例に取れば、大陸、香港、台湾、シンガポール、マレーシアなどの中国語使用地域において同じ概念に対して異なる術語が用いられるケースが頻繁に起きている。意思疎通に障害を来している現状に政治体制の相違を超えて、どのように対処していくかという問題がある（注28）。これは日韓を含む漢字使用圏の問題でもある。中国語は基本的に音訳の形で日本語、韓国語のことは取り入れることができない（逆も真と思われる）。西洋との間は言うまでもなく、東アジア域内における相互間の概念受容が漢字に頼らざるを得ない所以である。かつてのように漢字による術語の共創共有はまだ可能か。それを実現するにはどうすればよいかを考えてみる時期が来つつあるのかも知れない。

のが術語の特徴と言われている。しかしそれと同時に整然たる体系をもつのが分野別の術語のもう一つの重要な特徴であることを筆者は指摘しておきたい。博医学会は新字を導入する際、「骨」「血」による偏旁部首が、術語体系の明示とそれによる記憶の負担軽減に寄与すると主張した。偏旁部首は漢字構成のパーツにすぎず、形態素レベルの単位ではないため、意味識別上、視覚以上の作用が期待できない。近代以降大量の複合語の出現によってもたらされた最も本質的な変化は漢字の語基化であると筆者は考えている。本稿で言う語基とは、つまり孤立した個々の漢字が多くの複合語において共通の構成素となり、中核的な造語成分となるものである。語基は近代以降の漢字接辞の形成と関連しながらも全く同じ性質を有するものではない。

蘭学の訳語にすでに「亜―、非―」、「―素、―酸」などの接辞的な成分が使用され、明治期に入ってから、「化、―性」などが成立した。一方、『医語類聚』だけでも「―脈、―皮、―管、―膜、―体、―炎、―質」などが複合語の構成素として頻繁に使用されている。同様の現象がホブソン、フライヤーらの術語集にも見られる（注27）。接辞より実質的な意味を持つ語基は、意味ネットワークのノードとしての役割を果たし、概念体系

注

- 1 利瑪竇・徐光啓『幾何原本』第一巻之首「界説三十六則」に「凡造論先当分別解説論中所用名目故曰界説（論を進めるに当たってまず用いる術語をそれぞれ解説しなければならず、界説と名付ける所以である）」とある。
- 2 荒川清秀（一九九七）『近代日中学術用語の形成と伝播―地理学用語を中心に』（白帝社）
- 3 沈国威（二〇〇一）『智環啓蒙塾課初歩』（一八五六）における前期洋学書訳語の継承と発展」（関西大学東西学術研究所創立五十周年記念論文集）一五一―一六六頁
- 4 沈国威（二〇〇七）『中国近代の科技術語辞典』（1858―1949）（『或問』第13号、一三七―一五六頁）
- 5 一八五五年前後、宣教師ホブソンは、「炎、精銻水」などを考案し、また「銀行、陪審、保険」も広州から東アジアに広がったものである。
- 6 沈国威（二〇〇七）『蘭学の訳語と新漢語の創出』（内田慶市・沈国威編『19世紀中国語の諸相』（雄松堂、二一七―二六一頁）
- 7 沈国威（二〇〇三）『明治の学問の用語』（『日本語学』12月号、三四―四四頁）。術語研究に関しては、復刻資料に『近代日本学術用語集』第1期、第2期（龍溪書舎、一九八八、一九九〇）があり、研究書に至ってはまさに枚挙に遑がないという有様である。以下の注に挙げた参考文献を参照。
- 8 幕末明治初期に「舍密―化学」「越列機―電気」「積極、消極―陽極、陰極」「健全―衛生」「解体―解剖」といった術語の交替が当時の漢学崇拜の風潮によって引き起こされたことは特筆すべきであろう。
- 9 杉本つとむ・呉美慧編（一九八九）『英華学芸詞林の研究

- 10 本文影印、研究、索引（早稲田大学出版部）
- 11 日本製術語の借用は、主に教科書と辞書類を通じて実現された。『科学辞典』（一九〇八）、『東中大辞典』（一九〇八）、『物理学語彙』（一九〇八）などは日本の術語辞典の翻訳であり、英華辞書の編纂も日本の英和辞書に負うところが大きい。辞書類は纏まった日本製術語を導入するに当たって、大きな役割を果たしたが、教科書は術語の普及と定着に貢献した。
- 12 沈国威（二〇一〇）「異文化受容における漢字の射程——日本の蘭学者と来華宣教師の場合」（『アジア文化交流研究』第5号、一三二—一五一頁）
- 13 大槻玄沢は「重訂解体新書・名義解」で「吾輩之直就彼邦書横文。抗顔強譯者也。（われわれは直接外国の言語に基づき、困難を承知の上翻訳に取りかかった）」と言っている。既存語を求めようとする「翻訳」は中国古典・仏典等にある語の再利用のほかに、幕末明治初期の漢訳洋書の訳語の導入に繋がった。沈国威（一九九六）「漢語の育てた近代日本語——西学東漸と新漢語」（学燈社『国文学』Vol.41—11、八〇—八六頁）を参照。
- 14 「漢字語基」、「軸字」（鈴木英夫）、中国では「語根」（孫常叙）などとも呼ばれ、造語成分として類纂に新造語に関わる。『医語類聚』（一八七二）や『哲学字彙』（一八八一）の語基についてそれぞれ高野繁男（二〇〇四）『近代漢語の研究』（明治書院）、朱京偉（二〇〇三）『近代日中新語の創出と交流』（白帝社）を参照。
- 15 蘭学の音訳語に用いられる漢字について、沈国威「蘭学の訳語と新漢語の創出」を参照。
- 16 「今所傳譯。務欲名義之妥當於原稱。不能以不私造語新製字以譯定。所謂融。腔。攝護。或解體。神經。濾胞之類皆是也。」
- 25 沈国威「異文化受容における漢字の射程——日本の蘭学者と来華宣教師の場合」にもかわらず新作字の衝動がいまも続いている。漢字研究者の蘇培成は新作字の乱立とその弊害を指摘している（『新造漢字的現状应当改变』、『科技術語研究』1999年第3期）が、拘束力のある政府方針が示されない限り、新作字乱立の現象は解消されないであろう。
- 26 韓貽仁（二〇〇八）「応充分發揮漢字在科学技术術名詞定名中的表意優勢」（『中国科技術語』2008年第4期、五五—五八頁）
- 27 「一炎」はホブソンの『医学英華字釈』（一八五八）にすでに見られる。
- 28 中国朝鮮自治区において中朝韓の術語の相違によるコミュニケーション問題が持ち上がっている。（しん・こくい 関西大学教授）

- 17 「重訂解体新書・名義解」巻の五。
- 18 「重訂解体新書」において大槻の気持ちには意識語の「濾胞」に傾いたが、新作字の「腺」が一般化した理由としては、同書の公刊が遅かった（一八二六）以外に、「腺」に接辞性があるためと思われる。
- 19 フライヤー（一九五三）「江南製造局翻訳西書事略」（張靜廬編『中国近代出版史料初編』上海、上雑出版社、九—二八頁）
- 20 Scientific Terminology: Present Discrepancies and Means of Securing Uniformity, Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China, American Presbyterian Mission Press, 1890, pp. 531-549. 同論文については王揚宗（一九九二）「清末益智会統一科技術語工作述評」（『中国科技史料』第12卷2、九—一九頁）を参照のこと。
- 21 フライヤーの方法は後に化学物質の標準的な命名法として中国政府に採用された。
- 22 沈国威（二〇〇八）「官話」（一九一六）及其訳詞——以「新詞」部定詞「為中心」（『アジア文化交流研究』第3号、一—三—一九頁）
- 23 沈国威「中国近代的科技術語辞典（1858—1949）」これは特に進歩の著しいコンピュータ工学、情報工学などの分野において顕著である。
- 24 音訳語を考案する時、意図的に意味を織り込む手法（例えば「倶楽部」など）は現在の中国では避けられている。例えば「艾茲病」に決定された。中国では外国の人名地名を音訳するための漢字一覧表が用意されているが、効率的に音訳形式の術語を産出するには、主要外国語の音節・漢字対応表が不可欠である。

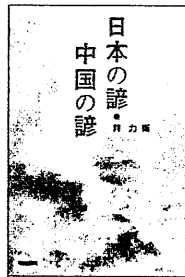
# 日本の諺・中国の諺

—— 両国の文化の違いを知る —— 陳力衛 [著]

共通する諺を多く持つ日本と中国。その中には、同じ諺でも両国で意味が違っているもの、中国では使われなくなったものもある。同じ諺が、なぜ両国で異なった意味を持つようになったか、中国人であり、日本語の研究者である著者が、諺の意味の違いを通して、日本と中国の文化や考え方の違いを探る。

- 「万事休す」  
 ● 日本では … 絶体絶命の窮地、おしまいだ！  
 ● 中国では … 何事もなく、すべてを忘れる
- 「呉越同舟」  
 ● 日本では … 仲の悪いもの同士が居合わせること  
 ● 中国では … 敵味方が協力して共通の目標を目指す

● 定価 1,365円(本体1,300円)・四六判・並製・242頁 ●



明治書院 〒169-0072 東京都新宿区大久保1-1-7 TEL.03-5292-0172 FAX.03-5292-6183